

上演 13 宮城県代表
尚絅学院高等学校
作
尚絅学院高等学校演劇部
「銀河鉄道の夜をカケル」

講評文
仙台市立仙台青陵中等教育学校
齋藤琴音

舞台上と客席の境界を無くし、会場全体を使うことで観客もこの劇に参加しているように感じる劇だった。平和や未来というテーマはこの世界の全員が例外なく当事者なのだとということを強く感じた。劇中の高校生たちは核や戦争、政治、平和という話題について日常会話の延長として明るく話し合っている。しかし、現実の私たちはどうだろうか。なんとなくタブーな気がして口に出さなかったり、話題にも上がらないことが常だろう。意見の対立や議論を避けがちな私たちは、彼らのようにもっと話し合いをするべきだと思った。

サソリ精神という言葉が、自分のためなく他人のために生きるという意味で使われていた。平和のために考え、他者に伝えるという行為も他人のために出来ることだと気が付き、ディベートへの決意を固めるシーンがあったが、バイトもまた他者のためになることをしている。皆日常の中に他者を思う気持ちは持っていて、その気持ちの範囲を過去や未来、世界中の人々に広げれば、皆が平和について考えられるのでは無いかと思った。

また、核抑止力が核を保有する根拠として挙げられていたが、他国を威圧することで自分達の身を守るという行為は、サソリ精神、つまり他人のために自分の命を捨てるという自己犠牲精神とは真逆の考え方のように感じた。

映像としての美しさも素晴らしい、銀河鉄道の夜の幻想的なイメージを良く伝えていた。ヨハネによる福音書の引用は、「友のために命を捨てること」という銀河鉄道の夜のメインテーマと重なるし、キリスト教に精通した賢治の作品でしかもジョバンニがヨハネにちなんだ名前であることを踏まえた粋なセリフだと思う。銀河鉄道の夜という作品にも核保有という問題にも真剣に向き合った作品であることがひしひしと伝わってきた。

コウタの銀河鉄道に乗る点や病気の母と料理を作る姉、セリフからジョバンニの役割を持っていることが明らかだが、カンパネルラを明確に表現したキャラクターはいなかったように思う。他者を助けて命を落としたカンパネルラは自己犠牲精神の体現者だ。そのカンパネルラがいないことで、私たちがサソリ精神を持ちカンパネルラのようにならなくてはならなくてはいけないのかもしれないと考えさせられた。

今生きる私たちが考えなくてはならないことだと強く訴えかける作品だった。